処刑の時間

ismotoya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
処刑の時間

【Ｎコード】
Ｎ０３０１ＢＡ

【作者名】
ｉｓｍｏｔｏｙａ

【あらすじ】
ピクシブでもあげてます。

「じゃあねまた明日」
そんな声が聞こえたが、俺に向けられて発せられた言葉ではないことは明白だった。俺に向けてそんなことを言う人間は存在するはずがない。声が聞こえなくなったのを確認して顔を上げた。都合よく教室には誰もおらず、ただ一人が残っているという状況。机の中に入れてある筆記用具や教科書などを鞄の中に入れる。全ての物を入れると嫌な重さになるが仕方がない。外の太陽が机の上を眩しく照らす。嫌な天気だなと思った。まさに快晴と呼ぶべき天気だが俺は好きになれなかった。かといって好きな天気は何だ、と尋ねられても答えられるわけではないが。さて今日も日課を行うか。そういった気分で席を立つ。窓の外から野球部の声が聞こえる。頭痛がする。こんな天気ほどなぜか嫌なことが起きるものだ。俺は自分の机をしばらく眺めて教室の隅にある道具入れへと向かった。

「この学校に入学して一ヶ月がたつじゃない。ゴールデンウィークも終わって席替えもしたし。高田くんもそろそろ学校に慣れて来た頃だと思うんだ。だからさ、一層みんなの仲を深めるためにもボーリング大会をやろうと思ってるんだけれど、どうかな。予定は来週の日曜日。みんな参加することになってるんだけれど」
自分は確実にいいことをしていると思い込んでの偽善的な行動。仲好し小好しみんなで行動すればいいと思っている幼稚な考え。昼休みに本を読んでいるとクラスの男子一人と女子一人が話しかけてきた。男の方は初めてまともに見る顔で名前すら知らない。坊主頭でいかにも人から好感を抱かれそうな爽やか気な笑顔を浮かべている。恐らく野球部に所属しておりクラスでも中心人物。部活の先輩や教師達からも信頼されるような優秀な生徒といった印象。吐き気がする。女の方は同じ中学だったので名前も顔も知っている。名前

は田上由美。違う高校に行って欲しかったしせめて違うクラスになって欲しかった。そんな女だ。当然、向こうも同じことを考えているだろう。

「それって必ず参加する必要があるわけ」

本を閉じて質問する。答えはすでに決まっていた。

「いやいや強制ってわけじゃないよ。これは俺たちが自主的に企画した親睦会だからさ、学校の行事ってわけじゃないからね」男は頭をかきながら言う。「参加するかしないかは自由。でも、高田くん以外は参加する予定なんだけれど」

持っていた紙を机に置く。紙は参加するかどうかを管理するもののようでクラスの名前が一覧で書かれており、横には参加の印なのか丸の記号が手描きで書いてある。当然ながら俺のところにはその印がない。しかし何がいった自由参加なのだろうか。みんなが来るのだからお前も来いという脅迫にしか思えない。しかもその脅迫を無自覚に、もしくはやって当然のことだと思っているあたりがたちの悪い。

「いやいいよ。俺は欠席する」

そういうと男はわざとらしい表情を浮かべる。田上はやっぱりね、とでも言いたげな顔だ。恐らく参加すると言ったら反対しただろう。

「え、でもみんな参加するんだよ。クラスの親睦を深めるためにさ、高田くんも参加してよ。もしかして来週の日曜日は用事があるの。それなら予定を変更してもいいけど」

やはりわざとらしい大げさな声で言う。自分で面白いとでも思っているのだろうか。理解不能だ。俺はその言葉を無視して机の上にある紙を手に取る。

「行く気になってくれた」

それを見た男は言った。俺は紙を両手で持つと、勢いよく引き裂く。紙はいとも簡単に半分となった。二人は驚いた顔をしてこちらを見る。予想外の行動なのか、声も出せないようだ。俺は半分にした紙をぐしゃぐしゃに丸め、ゴミ箱へ向かって投げる。投げた紙は

ゴミ箱へ向かって飛んで行ったが、惜しくも入らなかった。少しくやしい。
「何やってるのよ。馬鹿じゃないの」
田上が怒鳴るように言った。顔面全体に私は怒っていますと出ている。
「自由参加と言っておきながら、断った奴にしつこく来るよう強要するなんてどこが自由参加なんだ。どうせここに参加するといった奴らも同じように言って誘ったんだろ。みんな来るからお前も来いってな。だいたい何が親睦会だ。本当に馬鹿な人間はそういうことが好きだな。そんなに交流したいのか。親睦を深めたいのなら、馬鹿同士でやっていろ。いちいち誘ってくるな。時間の無駄だ」
「何その態度。せっかくこっちが誘ってやってんのにふざけてんの。そんな風に断るのが格好いいとでも思ってるわけ。あんたみたいな」
机を蹴り出さんかばかりの勢いで田上が声を発する。周りにいる人間が驚いたようにこちらを見る。男はなだめるように話しかけていた。しかし何が誘ってやるのに、だ。誰が親睦会を開いてくれと頼んだ。自分が与えるものなら全員が喜ぶとでも思っているのだろうか。クラスの中心にいるだけで神様か何かになったつもりなのだろうか。本当にくだらない人間だ。
「もしボーリングが嫌なら別のものにするけど、どうする」
「そこまで言う必要はないわよ」
返事をする前に田上が言った。
「そもそもこんな奴を誘うのが間違ってるのよ。こんな頭がおかしい奴を誘う必要なんてどこにもないわよ。横溝も知ってるでしょ。こいつがどんなに頭がおかしいか。それにあんな頭のおかしい女も誘うし。クラスの親睦会っていってもね、こいつらみたいに最初から他人に合わせられないような人間なんて邪魔なだけだから無視しとけばいいのよ。ああそういえばあの女は参加するんだってね。嫌だ嫌だ。今から中止になったって言って来てよ。キチガイと一緒にいると移るかもしれないから」

言い終えたあと机の上に置いてある出席簿をひったくり顔も見たくないとばかりに席を離れる。それに横溝と呼ばれていた男も続く。
「予定通り来週の日曜日に行うから、気が向いたら参加して」
少し離れた場所から声が聞こえたが無視して本を開いた。

掃除道具入れを開けると嫌な匂いが漂ってきた。カブトムシのものに似たかなり独特で鼻の奥を刺激する匂い。中に手を入れて雑巾を一枚手にとって扉を閉める。掃除が終わった直後なので洗う必要はないだろう。
しねキチガイ気取り野郎死ねゴミいらない人教室から出て行け精神病院に入れというか死んでくださいキチガイがうつるから来ないでください一生の一度のお願いだから死んでください脳みそ腐ってるんじゃないのボーリングには絶対に来ないでねつぶれろしねしねしねしねしね
雑巾を机に押し付けて上下に動かす。油性でしっかりと書かれているせいで上手く消えない。気温が高いせいか汗が出てくるのが分かる。
「手伝ってあげようか」
声が聞こえた。手を止めて声のする方を見るとそこには女が一人立っていた。肩まで伸びた綺麗な髪に病的なまでと表現できるほどの白い肌。俺の方をじっと見る垂れ目がちの目はまるで眠たそうに薄く開いている。その薄く開いた目にある黒い部分は光を感じられない、明るさの欠片もない、まるで爬虫類的とで言うべきものだった。何とも不思議な雰囲気を漂わせている女だ。田上の言う頭がおかしい女はこいつのことだろう。と直感的に判断することができた。
「いやいいよ」
そう返事をして再び手を動かす。なぜか心臓の鼓動が早くなった。小さな足音が聞こえ、こちらに近づいてきているということが分かる。俺は急いで残りの文字を消した。
「大変だね、いつも」

女はすぐ近くにまで移動していた。机のすぐ前に立ってじっとこちらを見つめる。思わず目をそらしたくなるような、こちらもずっと見ていたいような、変な気分になる視線だ。

「いや、もう慣れた」

「ふぅん慣れたんだ。それはそれは」

何がしたいのか分からなかった。今日の昼休み時のように何か伝達があってといったこと以外で話しかけられたのはこいつが初めてだ。同じ中学だった人間が俺に関する悪評を笑い話とともに広めていることを知っていた。「あいつは変なことをする」「「あいつは頭がおかしいから近づかない方がいい」などと話しているのを何度も聞いたことがある。話しかけられないのはそのせいだろうと思っていたがこちらとしても好都合だった。

「君は僕と同じような人間だね」

そう言って微笑む。笑っているようで笑っていないとも感じ取れる実に不気味な顔。声も嫌に平坦でまるで台詞を暗唱して読んでいるかのような感じだった。明るさの全くない人生で初めて聞く声。女なのに一人称が僕というのも初めてだ。しかしその一人称がいい感じにミスマッチしていて何とも言えない神秘的な雰囲気を漂わせている。俺は会って数分も立たないうちに引き込まれていた。飲み込まれていた。そいつはそのままの調子で話を続ける。

「君は日常に退屈しているしその日常に疑問を持たずただへらへらと暮らしている人間に腹をたてているでしょ。初めて見た時から感じてたんだ。んで、周りの人達が君のことについて話していのを聞いて確信したの。ああこの人は僕に似てるんだってね。ねぇできたら君の考えを教えてよ」

俺は質問に是正の意味を込めて頷き俺の考えを話した。日常の奴隷について。日常を壊したかったという願望について。本当はあの時以来この話を誰かにするつもりはなかった。絶対に理解されない考えだと思っていた。しかし目の前にいる人物ならきっと理解してくれるだろう。そう思って勢い良く話した。こんなに話したのは本

当に久しぶりのことだ。
「うんやっぱりそんな考えを持ってたんだね。僕が思っていた通りだよ。だって君はそんな目をしているからさ。実に嫌な目をしてるよ。君は。うん、実に嫌な目だ。死んでいて絶対に人を信用しないとでも宣言しているかのような印象を受けるね。爬虫類的とでもいうのかな。全く温かみを感じない目だよ。見つめられたら体温が三度ほど下がってしまいそう。冗談だけど。ああ一応言っておくけど貶しているんじゃないからね。思いっきり貶しているように聞こえるかもしれないけれど僕的には褒めてるんだよ。君は僕と同じような目をしてる。ねぇよく死んだ魚の目だって言われない。僕は前までよく言われてたんだ。「お前の目は死んでいる」とか「もうちょっと明るい感じにしなよ。カラーコンタクトを入れて」とかね。実の兄からも言われたことがある。というかお兄ちゃんから一番言われてたよ。そんな言葉をね。全く嫌になるよ。好き好んでこんな目に産まれたんじゃないのにさ。しかも性格もこんなんだ。お母さんも猫ばっかり可愛がってた気持ちも分からないでもないよ。まぁあの人はお父さんを除けば、何よりも猫を大事にしている人だったけど。自分の子供なんて猫と比べたら空き缶と同レベルな感じと言っても大げさじゃなかったよ。もっともお姉ちゃんが僕のことを溺愛してくれたから寂しくはなかったけどね。ああ、話が横道にそれたよ。君は僕がこんなに話す人だとは思わなかったでしょ？」図星だった。
「みんな僕が大人しくて無口そうな人間って思って話しかけてくるから、僕が話しだすとびっくりするんだ。今回は僕から話しかけたんだけどね。それでなんで僕がこんなに話すかというと、それは単純な理由で、単に話をすることが好きってことなの。僕は誰かと話をするのが三度の食事より好き。でも、僕とお喋りをしてくれる人は本当に少ないの。今のところは誠司って人ぐらいしかいないんだ。だから僕は心の中で会話してるの。僕が作った架空人物とね。話をすると言ってもその架空人物、名前は南昭って言うんだけど、そいつは基本的に聞き役で、時々相槌を打つだけ。今みたいに僕が一方

的に話すんだけどね。それが楽しんだけど。でも架空で話すのはいくら楽しくやっても架空なわけで、現実の話がしたいという欲求を全部満たしてくれるわけではないんだよ。だからこうやって話をしてしまうんだ。もしかして迷惑だったかな」俺は首を横に振り「そんなことはない」と答えた。むしろもっと話を聞きたいと思った。

「それは嬉しいよ」無邪気な笑みを浮かべて言う。「みんな君と同じようなことを言うんだけど、それが明らかに嘘だと分かるんだよ。表情とか声色とかでね。一度話したらもう二度と話か出来ない。そんなパターンがほとんどだよ。残念だけど。ああ、そうそう。僕はこう見えてもけっこうもてるんだよ。意外でしょ。ラブレターとかいうのも何度か貰ったことがある。僕は告白してきた人に全部いいよって言ったんだけど、どれもあまり長続きしなかったね。一番長かったので、二週間ぐらいかな。その人は遠くのところへ行っちゃったけどね。僕は会話する人がほしいのに残念だよ。でも、その点君は違う。君が今言ったそんなことはないという言葉は嘘じゃなさそうだ。もっとも君がとんでもない嘘つきで、巧妙に嘘をつくのが得意なだけかもしれないけれども、そんなタイプには見えないしね。君は本当のことは言わないけど、嘘はつかない畑出身の人間だろうから。なんでそんなことが分かるのかって顔をしてるね。それは僕が超能力者だからだよ。嘘だけど。正解を言うと僕が嘘つきだからさ。四六時中嘘をついてるよ。南昭という架空の人物にね。だから嘘つきという人物を見抜く能力は人一倍持ってるんだよ。詐欺にあっても安心だ。まぁ何が言いたいかと、君とは長い付き合いになりそうだなって話。だから君にこれを貸すよ」

そう言ってポケットから何か取り出す。それは最初何なの分からなかったが、少しして携帯電話だということに気がついた。真新しい最近買ったばかりといった感じだ。俺は差し出された携帯電話を受け取る。他人、しかも初対面の人間に携帯電話を貸すとは普通ではない。

「これでいつでも僕と連絡を取り合えるね。とっても嬉しいよ。い

つでもメールや電話をしてきてね。僕もがんがんじゃんじゃん連絡するからさ。遠くに離れててもお喋りできるって素敵だね。科学力万歳だよ。携帯電話はもう僕と付き合いがなくなると思ったら返してくれればいいよ。いつ返すかは基本的に君の判断に任せてあげる。基本的にね。明日だろうと、一週間後だろうと、今日の放課後だろうと、五分後だろうと、百年後だろうといつでもいいよ。もっとも百年後に返ってくることはないだろうけど。僕はともかく、君はそこまで長生きしそうな感じじゃないからね。何だか君は早死にしそうな気がするよ。ちょうど六月初めあたりにね。六月に入って、学校にも慣れてきて快適だなって気が緩んだ時にドカーンみたいな感じ。君が死んだときはそれなりに悲しんであげる」そう言って笑い声をあげる。とても楽しそうな笑い声だ。どうやらジョークのつもりだったらしい。俺にはいささか理解しにくいジョークだ。「まぁそれはおいといて。なんで僕が君に話しかけたかというとね、君を手伝いたいからだよ。僕も日常を壊す行為を手伝いたいってわけ。多分だけど、君は自分の嫌いな日常を壊そうとしてるんだよね」俺は黙ったまま頷く。「実際にその活動をしてきたんだよね」再び頷く。「でも、それは今のところを見ると失敗してきたと」自分の失敗を認めるのは嫌なことだったが、俺は素直に頷いた。「僕の予想通りだね。でも、日常を壊せなかったからといっておちこむ必要はないよ。だって日常を壊すのはとても難しいことだからね。どんなに凄くて有能な人物でも、普通で無能な人間の集団には敵わないんだよ。だから大体の物事は大多数の普通の人達を味方につければ勝てる。あのヒトラーだってドイツを支配するために、民衆を味方にしたんだからね。でも君が行なっている日常を壊すという行為はそう簡単にいかない。日常を壊すためには、その大多数の人達を敵にしなくちゃならないからね。だって普通の人達は日常が壊れると困るような人ばかりだから。まさに日常の奴隷だね。だから日常を壊すというのは難しい。君が何年一人でやっても無理だと思うな。これは何も君を馬鹿にして言ってるわけじゃないんだよ。それは実際

にやってきた君なら分かるはずだ。日常を壊すという行為がどんなに難しいものなのかね。一人でやったら誰にでも無理でしょ。もし一人でそんなことが出来る人間がいたら神様だ。ぜひとも会ってみたいね。でも、僕と君とが力を合わせればきっと日常も壊せると思うんだ。ねぇどう思う」

「俺に協力してくれるのか」

実際のところ日常を壊すとい行為は不可能だと分かっていた。恐らく麻衣がどんなにすごい人物だろうが日常を壊すのは不可能だろう。それでも俺の考えに賛同し協力してくれるというだけでもとても嬉しく感じた。

「うん。僕は力の限り協力してあげるつもり。僕はそんなことやったことないけど、とても楽しそうだしね。日常に退屈しているという点では君と僕は同じだから。僕は嘘をつくけど、約束は絶対に守るんだ。だからね、僕が君の、高田弥君の日常を壊してあげる。だからよろしくね」

どうやら俺の名前を知っているらしい。俺はクラスの人間の名前は自分のもの以外は知らなかった。

「こちらこそよろしくお願いするよ」

後で名前を調べとこうと思った。

「ふむふむ今の反応を見るとどうやら僕の名前を知らないみたいだね」嬉しそうに微笑む。「まぁ君は他人に全く興味がなさそうな人だからしょうがないかな。過ぎたことはどうでもいいしね。過去より未来の方が大事だと思うし。僕の名前は野宮麻衣。苗字で呼ばれるのは嫌いだから、麻衣って呼んでくれたら嬉しいよ。僕も君を弥って呼ぶから。ねぇ早速名前で呼んでみてもいいかな」

黙って頷く。他人に名前で呼ばれるのは本当に久しぶりだ。何だか気恥ずかしい。

「これから末永くよろしくね、弥」

麻衣は満面の笑みで言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0301ba/

処刑の時間

2011年12月31日18時49分発行